

韋提希における「未来世」という課題

一 樂 真

はじめに

浄土の教えが語る人間にとつての救いは、狭く言えば人と人との関係、広く言えばあらゆるものとの関係の問題を離れてはない。それ故、世間を超えろと言われる場合も、世間と没交渉になることを意味しない。世間を超えた眼をもつてこそ、初めて世間の問題を見ることができ、世間に飲み込まれることなく、世間の中を生きて行くことができるのである。法蔵菩薩が国を棄てて、なおも国土を莊嚴する願を起す理由もそこにある。関係を生き、関係の中で苦悩する人間の問題を見つめてきたからである。

阿弥陀の浄土を説く経典や論書においては、浄土は娑婆世界と対比され、空間的な世界として語られることが多い。「西方極樂世界」という表現などは、この世と異なる別の世界を指し示している。そしてその浄土における関係の在り方は、たとえば『浄土論註』に出る「莊嚴眷屬功德成就」などを見れば、「眷屬無量」の世界として語られている。ここには、浄土において新たな関係が開かれることが読み取れる。身近なことでは、我々の人間関係の転換を実現するという浄土のはたらき（功德）が語られている。

ただ、浄土の救いは我々における空間的な関係の転換ということにはとどまらない、もう一つの面があると考えられる。それは、過去から現在、そして未来という時間的な流れの中を生きている人間の課題に応えるという面である。過去を誇る場合もあれば、過去に縛られる場合もある。また未来を夢見る場合もあれば、未来に不安を抱く場合もある。そんな希望や期待、あるいは不安や重圧として過去と未来は現在と深く関わっている。現在は過去と未来を内容としているとも言えよう。

このような時間の中で苦しみ悩みを抱えながら生きている我々の問題に対しても浄土は応えていると思われる。そのことをこの小論では尋ねたい。特に『観経』に見える韋提希を通して考えてみたい。それは、韋提希に起こった転換が単に人間関係における救いを実現しただけでなく、過去の執われから韋提希を解放し、未来を見通した現在が開かれるという救いを示していると思われるからである。

一、善導による「序分」決定の意義

『観経』についての注釈書は数多い。ただ、經典が意図しているところを読み取るということは容易いことではない。それは親鸞が、

善導独り、仏の正意を明かせり。

〔定本 教行信証〕九〇 原漢文

と述べるように、『観経』を注釈したものが多く中で、善導のみが『観経』を説く釈尊の意図を明らかにしたと押さえる通りである。善導自身も『観経』を注釈した『観経疏』^①において、

それがし今、此の観経の要義を出して古今を楷定せんと欲す。

〔真宗聖教全書〕一・五五九 原漢文

と述べているように、先行する『観経』の注釈書が仏意を明らかにするものではないからこそ、『観経疏』を書く必要があったのである。これについては多くの研究がすでになされているので再説はしないが、その課題を概括的に言

えば、『観経』は誰のために説かれたのか、という一点にある。そのために善導は「玄義分」において『観経』の本
文を注釈するに先立って、『観経』の説意を確かめるのである。その中、上品上生から下品下生にいたる九品につい
て、従来までの諸師の解釈とは全く異なる見方を提示している。いわゆる「九品唯凡」という見方である。

善導に先立つ諸師の解釈は、九品を仏道修行という観点から、九つの段階に分けて捉えたものと言える。これに対
して善導は、九品を人間のレベルとして見るのではなく、どんな教えに遇ったか、あるいは善や悪を作るような縁に
遇ったかという、遇縁の異なりとして押さえ、九品ともに凡夫であることを明らかにしていく。しかもその一々に
「仏、世を去りたまいて後」という言葉を付し、釈尊が入滅後の凡夫のために説かれた經典であることを確かめるの
である。^③

これは『観経』の直接の対告衆である韋提希をどのように見るかということにもつながっている。諸師が「無生法
忍を得る」ことを理由に韋提希を「聖者」と位置づけるのに対し、善導はどこまでも韋提希は凡夫であるとす
る。「序分義」においても韋提希の得る「無生忍」が菩薩になって得られるものとは異なり、凡夫において成り立つもの
であることをわざわざ述べている。^④

きわめて大雑把にまとめたが、このような善導の確かめは、『観経』がどこまでも凡夫のための説法であること、
しかも「仏滅後」という時代を生きる者のための説法であることを明らかにすることになった。そして、仏滅後の衆
生のための説法であることを經典そのものが語っていることを明らかにするために、次の言葉までを『観経』の「序
分」として位置付けるのである。

時に韋提希、仏に白して言さく、世尊、我が如きは、いま仏力を以ての故に彼の国土を見たてまつる。もし仏滅
後のもろもろの衆生等は、濁悪不善にして五苦に逼められん。いかにしてか当に阿弥陀仏の極楽世界を見たてま
つるべき。

序分とは、經典を読む際に、その經典がどんな状況の下で、どのような問題に応答して説かれたものであるかを示している部分である。その意味で、どこまでを序分と読むかによって、その經典の課題は異なって見えてくることになる。『觀經』の場合、たとえば、宮殿に幽閉された韋提希の前に釈尊が現われてくださる前までを序分と見るならば、『觀經』は韋提希の悩みに応える説法ということになるであろう。そして実際、『觀經』をそのように受けとめている例は少なくない^④。

善導は、『觀經』の直接の対告衆が韋提希であることを踏まえながら、韋提希が凡夫であることを押さえることによつて、『觀經』はどこまでも凡夫のための説法であることを明らかにしたのである。そして、それは仏滅後の衆生までも包んでいることを確かめるために、右に挙げた韋提希の問いが出るところまでを序分としたのである。善導の序分決定によつて、『觀經』は韋提希個人の苦悩に應える經典ではなくなった。韋提希という一人の凡夫の苦悩を通してながら、仏滅後の遠い未来を生きるすべての凡夫に対する説法であることが明かされたのである。それを親鸞は、善導独り、仏の正意を明かせり。定散と逆惡とを矜哀して、
〔定本 教行信証〕九〇 原漢文
と述べていたのである。

では、この「仏滅後の衆生」ということが、なぜ韋提希において課題となってきたのであろうか。またそれはどんな内容をもっているのだろうか。

二、韋提希の苦悩

釈尊在世当時、マカダ国の王子であった阿闍世が父の頻婆娑羅王を牢獄に閉じ込めて餓死させてしまふ、いわゆる「王舎城の悲劇」が『觀經』発起の縁となっている。その中で、頻婆娑羅王の牢獄に食べ物を密かに運んでいたことが露見し、韋提希自身も阿闍世によつて宮殿に幽閉されることとなる。その韋提希の苦悩はどのようなものであった

であろうか。

善導は『観經』序分を三序六縁に分けて読んでいくが、その中、韋提希が幽閉されて釈尊にまみえる一段を「厭苦縁」と名づけ、韋提希の苦悩を読み解いていく。口では釈尊にお出でいたたくのは恐れ多いと述べた韋提希であったが、その根にある深い願いを見抜いて釈尊自身が宮殿にやって来られる。その姿を見た韋提希について經典は次のように説く。

自ら璎珞を絶ち、身を挙げて地に投げ、号泣して仏に向いて白して言さく、世尊、我、宿何の罪ありてか、此の悪子を生める。世尊また何等の因縁ありてか、提婆達多と共に眷属たる。〔真宗聖教全書〕一・五〇 原漢文

国の大夫人として威嚴を保っていた韋提希であったが、釈尊を目の前にした時に、自ら身を飾っていた璎珞を絶ち捨て、身を投げ出して号泣する。そして釈尊に向かって自らの思いをぶつけることになる。

經典には一連の事柄として説かれているが、善導は一つの変化が韋提希に起こったと見るために、「号泣向仏」までと「白言」以下を分けて解釈している。そして、「白言」以下について、次のように述べている。

「白仏」と言う已下は、此れ夫人婉轉涕哭すること量久しくして、少しく惶めて始めて身の威儀を正しくして、合掌して仏に白すことを明かす。我、一生より已来、いまだ曾て其の大罪を造らず。いぶかし、宿業の因縁、何の殃咎ありてか、此の兒と共に母子となると。此れ夫人既に自ら障深くして宿因を識らず。今、兒の害をかむるに、是れ横に來れりと謂えり。願わくは仏の慈悲、我に徑路を示したまえということを明かす。

〔真宗聖教全書〕一・四八四 原漢文

号泣し悶絶していた韋提希が、号泣のままに釈尊に何事かを訴えるのではなく、「量（やや）久しくして、少しく惶（さ）めて」と善導は押さえる。それによって韋提希は身の威儀を正しくし、合掌しながら仏に對して申し上げる。ただ、姿は合掌という礼拝の形はとっていても、韋提希の口から出たのは仏の教えを求めた言葉ではなかった。かえ

って、これまでは表面化することのなかった、韋提希の奥底に潜む愚痴が噴出したのであった。

韋提希は、自分では過去に罪を犯したつもりはなく、現在の苦しみの原因が見えていない。善導が「是れ横に來れりと謂（おも）えり」と押さえる通りである。そのために、なぜ私がこのような目に遭うのかという「徑路」を問わずにおれないのである。言い換えれば、今まで問うことのなかった「我、一生より已來、いまだ曾て其の大罪を造らず」という自らの過去が初めて問題になったのである。いわば、国の大夫人として立派に振舞ってきたことが破られ、韋提希のかかえる深い闇がはじめて表面化したと言えよう。

この善導の押さえは重要で、韋提希の愚痴が単なる愚痴にとどまるものではなく、その中に深い願いがあることを読み取るうとしている。人間は思い通りにならないことに直面した時、「何故こんなことになったのか」「どうして私だけが」と初めて自らの人生を問わずにおられなくなる。しかし、それは「原因はここにある」とか「こういう理由でそうなった」といくら説明されても、納得などできるものではない。

韋提希の愚痴に対して釈尊が直接に応えることなく、沈黙しているのは、そのことをよく示している。韋提希自身において、問いが熟し、明確になるのを待つておられるのである。いわば、釈尊は韋提希に寄り添われたのである。ただ、ここでの韋提希自身は、目の前の苦しみから逃れることに勢一杯である。それが提婆達多に苦しみの原因を押し付け、さらには提婆達多の師である釈尊に対しても不満をぶつけることとなったのである。

では、自分の外に苦悩の原因をもとめていくような韋提希に、どのような変化が起こっていくのか、それを次に見ていきたい。

三、「光台現国」を通して明らかになったこと

釈尊に対して愚痴をぶつける韋提希が、その愚痴の中から次には釈尊に対して憂悩なき処を説いてほしいという願

いを述べる。経文では前の発言と一連のものとして読むことができる。またそのように読むのが一般的かもしれない。しかし善導は、ここからを「欣浄縁」と名づけ、新たな一段と見ている。韋提希の中に変化が起こっていることを読み取ろうとしているのである。特に、

願わくは我、未来に悪声を聞かじ、悪人を見じ。

〔真宗聖教全書〕一・五〇 原漢文

という韋提希の言葉については、次のように解釈を加えている。

「願我未来」と言う已下は、此れ夫人、真心徹到して苦の娑婆を厭い、樂の無為を欣いて、永く常樂に帰することを明かす。但、無為の境、軽爾として即ち階（かな）うべからず。苦悩の娑婆、輒然として離るることを得るに由なし。金剛の志を発すに非ずよりは、永く生死の元を絶たんや。もし親（まのあた）り慈尊に従いたてまつらざば、何ぞ能く斯の長き歎きを勉れん。

〔真宗聖教全書〕一・四八五 原漢文

先にも述べたが、韋提希は国の大夫人として立派に振舞い、家族の為にも国の為にも尽くしてきた。それが息子に裏切られるという形で破綻した時、この世に対する一切の期待が打ち砕かれたと言つてよい。それが「無憂悩処」を求めることに加え、「願わくは我、未来に悪声を聞かじ、悪人を見じ」という発言にまでなったのである。この世を厭うにとどまらず、未来にわたって、悪から離れたたいという願いである。「真心徹到」という一語は、苦悩の娑婆を厭う韋提希の心を押さえたものである。

ただ、善導自身がその後述べているように、苦を厭い、悪を離れたたいという願いがどれほど強くても、それだけでは離れることは実現しない。「金剛の志を発す」ということが不可欠であり、それはまた「慈尊」（釈尊）に従うことがなければ成り立たないことなのである。

苦悩の娑婆を厭うという心自体、我々に起こってくることは極めて難しい。それは娑婆に対する執着が深いことに因る。また、娑婆を厭う心が起こったとしても、自分に都合の良い方向に状況が変われば、すぐに消えてしまう一時

的なものにすぎない。そして、最も大きな問題は、たとえ苦の娑婆を離れようと心底思ったとしても、どうすれば離れることができるかが分からないということである。ここに積尊に従わねばならない決定的理由がある。娑婆を離れ得た者にしか、娑婆を離れるとはどういうことかが分からないからである。

韋提希には、自らが描いてきた娑婆に対する思いが破綻することを通して、初めて娑婆を離れんとする願いが起こつてきた。それは娑婆を超えた方として初めて積尊を仰いだことでもあった。その願いが次の「我を教えて清浄の業処を觀ぜしめたまえ」^⑤という韋提希の発言につながっている。韋提希に見られる変化はとても重要である。もし、娑婆を離れるということが課題にならないままであれば、積尊を前にしても結局は娑婆を更に延長することしか考えないであろうし、積尊もまた娑婆における優れた人としか見えなであろう。積尊の沈黙は実にこの韋提希における問いの成熟を待ったものであった。

興味深いのは、ここでも積尊は韋提希に対して口で説くことをせずに、眉間から光を放って、十方無量の世界を見せておられることである。娑婆を離れる道を求める韋提希に、すぐに答えを示すのではなく、韋提希自身に選ばせるのである。それによって、娑婆を離れるとはどういうことか、清浄なる世界とはどのような世界なのかを韋提希自身に気づかせることになっていく。そして韋提希は、数多くの諸仏の世界から何処か一つを求めるのではなく、阿弥陀仏の世界に生まれることを願う。親鸞はこの一段を『浄土和讃』觀經意において、

恩徳広大釈迦如来 韋提夫人に勅してぞ

光台現国のそのなかに 安樂世界をえらばしむ
と端的に詠っている。^⑥

（『定本親鸞聖人全集』第二巻 和讃篇四六）

韋提希が阿弥陀仏の世界を選んだ理由については、經文には明示されてはいない。そのため、何故、阿弥陀の世界なのかということが見えにくい。また、阿弥陀の世界と諸仏の世界とを比較して優劣をつけるような読み方もしかな

ない。しかし、善導の『観経』の読み込み、それを受け継いだ法然・親鸞の視点を念頭に置くならば、韋提希の上には自分がどういう者であるのかという目覚めが起こったと考えられる。あえて一言で言えば、「阿弥陀仏にたすけられなければならぬ我が身」という目覚めである。つまり、韋提希は諸仏の世界と阿弥陀の世界に優劣をつけて選んだわけではなく、我が身において娑婆を離れることが真に成り立つのが阿弥陀の世界であることを表明したのである。この世における人間関係に破綻を来たした韋提希は、無憂悩処を求め、未来においても悪から離れた世界としての清浄処を求めた。そして釈尊の眉間からの光によって、あらゆる諸仏の世界を見せられたのが「光台現国」であった。ところが、多くの国を見る中で明らかとなってきたのは、どんな世界に行ったとしても、新たに悩みを作り出している我が身の事実であった。善導の有名な言葉を借りれば、

自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して出離の縁あることなし

〔散善義〕『真宗聖教全書』一・五三四 原漢文

という我が身である。現在「罪悪生死の凡夫」であるだけでなく、遠い過去から流転を重ね、未来にわたって「出離の縁あることなし」という我が身である。

このような身を生きているという事実を目を覚ましてみれば、自分の努力を当てにして問題の解決を図るということにはならない。また、今いる世界から別の世界に行けば問題が解決することもあり得ない。場所を変えたり、時間が経過すれば解消するという話ではないのである。

では、阿弥陀仏の世界に生まれるということがどんなことであるか、それを尋ねなければならないが、今は一旦、次のようにまとめておきたい。光台現国を通して韋提希に見えてきたのは、事件の起こった王舎城から脱出することが苦悩の娑婆を離れることにはならないということ。そして、阿弥陀仏の世界に生まれることが「永く生死の元を絶つ」道であるという発見である。韋提希にとっては、一大変革であった。自らの過去に縛られ、未来も全く見えな

った韋提希。苦悩の娑婆から解放されることを求めながらも、何をどうすれば良いのか、全く分からなかった韋提希の人生が、阿弥陀仏の世界を願うという方向をもったのである。

四、積尊からの呼びかけ

韋提希が阿弥陀仏の世界を願うことを積尊に申し上げた時、積尊は微笑される。それは韋提希に起こった変革が、韋提希個人にとどまるものではなく、広く一切衆生を利益するものであったからである。善導が「広開淨土門」と押さえ、

ただ韋提、去（ゆ）くことを得るのみにあらず、有識これを聞きて、みな往く。此の益あるが故に、所以に如来微笑したもうなり。

〔序分義〕「真宗聖教全書」一・四八八（原漢文）

と述べる通りである。親鸞も「釈迦微笑の素懷^⑦」と述べ、ここに積尊の出世本懐があることを明らかにしている。つまり、人生の方向が決まった韋提希の喜びは、一切衆生を救わんと願う積尊の喜びでもあったのである。

続く経文では、微笑する積尊の口からの光によって、牢獄に幽閉されている頻婆娑羅王が利益を受け、阿那含を成じたことが説かれている。これは韋提希に起こったでき事が、韋提希一人にとどまらないことを具体的に示しているものと思われる。これが更に末尾の「得益分」になると、「五百の侍女」、さらには「無量の諸天」も利益を受けることが述べられる。ちなみに、『観経』の中では、阿闍世がどうなったのかは示されていない。

このような韋提希における変革をくぐって、積尊は初めて言葉をもって韋提希に語る。いま一々を詳しく見ることはできないが、注意されるのは、韋提希に対する積尊の説法が、韋提希個人に対するものではないという点である。たとえば、初めには韋提希に対して次のように呼びかけられる。

汝いま知るやいなや。阿弥陀仏、此を去ること遠からず。汝まさに繫念して、諦らかに彼の国の淨業成じたまえ

る者を観ずべし。我いま汝がために、広く衆（もろもろ）の譬を説き、

〔真宗聖教全書〕一・五〇 原漢文

ここに「汝」とある通り、釈尊は韋提希に直接語りかけていることは間違いない。しかし、すぐに続いて、未来世の凡夫のための説法でもあることが釈尊自身によって確かめられている。

亦、未来世の一切の凡夫の浄業を修せんと欲わん者をして、西方極楽国土に生ずることを得しめん。

〔真宗聖教全書〕一・五〇 原漢文

つまり、韋提希への説法が同時に未来世の凡夫にとつても苦悩を超える道を示すことになるということである。更に次の「定善示観縁」においては、

仏、阿難および韋提希に告げたまわく。諦かに聴け、諦かに聴け。善くこれを思念せよ。如来いま、未来世の一切衆生の煩惱の賊のために害せられん者のために、清浄の業を説かん。善いかな、韋提希、快くも此の事を問えり。阿難、汝まさに受持して、広く多衆のために仏語を宣説すべし。如来いま、韋提希および未来世の一切衆生を教えて、西方極楽世界を觀ぜしめん。

〔真宗聖教全書〕一・五一 原漢文

と説かれている。ここでは直接の対告衆である韋提希に加えて、阿難が呼ばれている。そして「諦かに聴け、諦かに聴け。善くこれを思念せよ」という確かめのもと、韋提希と「未来世の一切衆生」のための説法が始まるのである。

阿難は多聞第一の仏弟子として有名であるが、この経においても、釈尊の教えを受持して伝えていく役割を担っている。これに対して韋提希は、教えを受持していく役割ではない。韋提希の苦悩がそのまま未来世の衆生の苦悩を表している。韋提希への説法が「未来世の一切衆生の煩惱の賊のために害せられん者のために、清浄の業を説かん」という意味をもっているのである。「一切衆生の煩惱の賊のために害せられん者」の代表が韋提希であると言つてよい。

釈尊が「汝」と韋提希に対して呼びかけるとともに、「未来世の一切衆生」にも呼びかけるところには、韋提希の苦悩が未来世の衆生の苦悩と通じていることが見据えられている。関係の破綻の中で苦悩する韋提希の悩みは韋提希

一人に止まらない。他に影響を及ぼし、未来にも影響を及ぼしていく。それ故にまた、韋提希の救いは韋提希一人に止まらない。他の人々の救い、未来世の衆生の救いを聞くのである。このような釈尊からの呼びかけによって、韋提希は自らの抱えている問題の大きさと深さ、そして未来にまでつながっていることを知らされたのである。

もちろん韋提希自身は、未来世の衆生を思つて阿弥陀の世界を求めたわけではない。しかし、韋提希の問いは未来にまで及ぶ。そのことを釈尊は「善いかな、韋提希、快くも此の事を問えり」と絶賛した。韋提希の問いがなければ、いくら釈尊が阿弥陀の世界を説こうとしても、聞きとどめられることはなかったからである。

五、「不能遠観」の自覚

善導が決定した『観経』序分の、最後の部分に着目したい。韋提希の問いを受けて、釈尊は韋提希と未来世の衆生のために阿弥陀仏の世界を観ることを教えるに当たつて、一つの確かめをされている。

仏、韋提希に告げたまわく、汝はこれ凡夫なり。心想羸劣にして未だ天眼を得ざれば、遠く観ることあたわず。

諸仏如来に異の方便ましまして、汝をして見ることを得しむ。
(『真宗聖教全書』一・五一 原漢文)

韋提希に対し「汝はこれ凡夫なり」と、まず凡夫であることが押さえられている。大切なのは、凡夫であるというのは釈尊から教えられる事柄であるということである。韋提希が自分で思うとか感じるという類の事柄ではない。その意味では、前に挙げた「罪悪生死の凡夫」という深信も、どこまでも教えられた内容である。

そして凡夫の中身が、「心想羸劣」と「未得天眼 不能遠観」と押さえられている。「羸劣」とは弱く劣ったことを意味するが、これも単に個人的な資質の問題ではない。時代や世間の関係の中で、翻弄され、大事なことを見失つていく在り方を言う。いわば、遇う縁によつてどのようになっても変わつていく弱さである。「金剛の志」をもてない者の謂である。また「未得天眼」とは、肉眼を超えた世界を見ることができないために、いつも自分の見える範囲のこと

で物事を判断することになる狭さを意味している。それ故「不能遠觀」も、一応は遠くを觀ることができないという意味である。しかし、再応いえば、単に阿弥陀仏の世界が遠いために觀られないということではなく、自分の思いを超えた世界には出遇いようがないという意味である。更に言えば、自分の思いを離れられないために、自分に直接関係ある問題しか目に入ってくることはない。まして、遠い国のことや、遙か未来のことなど、思いもよらないという在り方である。「諸仏如来に異の方便ましまして、汝をして見ることを得しむ」という釈尊の言葉は、そんな凡夫が阿弥陀仏の世界に出遇うには、諸仏如来の方便に依るほかないことを確かめている。

この釈尊の説法を受けて、出てくるのが韋提希の次の問いである。

世尊、我が如きは、いま仏力を以ての故に彼の国土を見たてまつる。もし仏滅後のもろもろの衆生等は、濁悪不善にして五苦に逼められん。いかにしてか當に阿弥陀仏の極樂世界を見たてまつるべき。

（『真宗聖教全書』一・五一 原漢文）

ここには仏滅後の衆生を視野に入れて、釈尊に問う韋提希がいる。当初は我が身に起こったことで一杯になり、そこから逃れることだけを求めていた韋提希であった。ところが、真に生死の迷いを超えるには阿弥陀仏の世界に生まれる以外にはないと知り、それを求めることになった。ここに至って、韋提希は阿弥陀仏の世界に生まれることを、釈尊入滅後の衆生の視点から問うている。

一見すると韋提希の心が広くなり、慈悲深くなつたように見えるかもしれない。しかし、もし韋提希が慈悲行を實踐できるようにしたのであれば、このような問いはでてこないであろう。どこまでも韋提希は「不能遠觀」の凡夫なのである。自分自身が仏力によつて阿弥陀仏の世界を見ることができたことが明確になつたが故に、仏滅後のことを問わずにおられなかつたのである。

たとえば、經文には表わされていないが、韋提希にとつて「仏滅後の衆生」には阿闍世も含まれていると考えられ

る。その阿闍世に対して韋提希は何ができるであろうか。凡夫の自覚が無い場合には、自らの判断や価値観を基準にして世に処するであろう。実際、王舎城の悲劇が起るまでは韋提希はそうやって生きてきたのである。また自らが慈悲行を実践する者となったのであれば、自らの力によって阿闍世を導くこともできよう。ところが、自らが凡夫であることが明らかになった時、これからどう関わっていくかが改めて問題になったのである。

この意味で、仏滅後の衆生のことを問うたのは、決して他の人を配慮してではない。仏滅後の時代を自分がどう生きていくのかということを問うたのである。釈尊がおられない未来を自分のこととして受け止めたのである。このように形で未来が見えたところに、韋提希には現在の自分が立つべき位置が明確になったと言える。

おわりに

自らが作ってきた業の中で、苦悩しながらも、それを自らのこととして受け止められずにもがき苦しむ韋提希が、釈尊の説法を通して変革を遂げていく様子を尋ねてきた。その中で韋提希にとって決定的な意味をもったのは釈尊の教えとの出会いであった。国の大夫人として立派に生きてきた韋提希にとって、自らの過去は誇るべきものであったに違いない。しかし、一たび周囲との関係が破綻した時に、過去は何の支えにもならなかった。また未来に対して描き続けていたであろう夢が一たび壊れてしまった時、未来は行く先の見えない闇でしかなかったに違いない。釈尊の教えとの出会いは、韋提希にとって過去を本当に見せてくれるものであった。同時に阿弥陀仏の世界に生まれることを願うところに、方向をもった未来が立ち現われたのである。

我々は、過去から未来へという流れの中で現在を生きているように感じている。しかしそのような現在は、すぐに過去へと流れ去るものにはかすぎない。現在といってみても無内容とならざるを得ない。真の現在は未来が明確になり、過去を内容とするところにある。阿弥陀仏の世界は、そのような現在を開くはたらきとして見ていくことができ

る。

註

- ① 善導は「観経玄義分」「観経序分義」「観経正宗分定善義」「観経正宗分散善義」と題名を付けており、「観経疏」と呼ぶことはない。ただ、本論では便宜上、四巻を括る名としては「観経疏」を用いる。また各巻を呼ぶ際にはそれぞれ「玄義分」「序分義」「定善義」「散善義」とする。
- ② 「女義分」経論和会門（『真宗聖教全書』一・四五〇～四五三）
- ③ 「序分義」定善示観縁（『真宗聖教全書』一・四九四）
- ④ 慧遠の『観無量寿経義疏』（大正蔵三七・一七七中）では、「唯願世尊」以下が正宗分とされる。また古蔵の『観無量寿経義疏』（大正蔵三七・二四〇下）では、もう少し前の、韋提希が釈尊に問いを致すところから正宗分と見ている。
- ⑤ 「観経」（『真宗聖教全書』一・五〇）
- ⑥ この和讃が「観経意」の第一首目であることについても興味深く、尋ねることが多いが、本論の主旨から離れるので、機会を改めたい。
- ⑦ 「化身土巻」（『定本 教行信証』二七六）
- ⑧ 善導は釈尊の口から光が出たことに着目し、頻婆娑羅王の得果を二乗のものと確かめている。後に韋提希が得る大乘の無生法忍と対比していることが窺われる。（『序分義』散善顯行縁 『真宗聖教全書』一・四八八）